

(翻訳) 金官加耶考古学の研究成果と流れ

趙 晟元*¹

訳：平郡 達哉*²・西村 葵*³・福田ことり*⁴

The research results and trends of archaeology in Geumgwan Gaya

CHO, Seong Won

(Translation : HIRAGORI Tatsuya, NISHIMURA Aoi, FUKUTA Kotori)

キーワード：金官加耶、発掘調査、研究史、大成洞古墳群、福泉洞古墳群

はじめに

文献資料の少ない加耶史研究において考古学が占める比重は大きい。もちろん、日本書紀に対する再評価や文字資料の新発見によって文献史学に活用できる資料が増加しているものの、考古学が果たす割合を圧倒するほどではない。これは加耶史のなかで比較的文献資料が残っている金官加耶に対する研究においても同様である。しかし、近年指摘されているように加耶史研究の不振¹⁾とともに金官加耶考古学も過去の研究成果に埋もれ発展の方向性が見えてこない印象を受ける。これは持続的な考古資料の増加にもかかわらず資料の内容・性質が偏り、一部の研究成果に対する論争が平行線を辿り続けているためと考えられる。このような問題点を打開するためには金官加耶に関する研究、特に考古学分野における研究史の整理を通して既存の研究成果とその方向性をまず把握し、研究を一段階高めるための新たな方向性を模索すべきと考

える。このような問題意識から本稿では、金官加耶考古学が新たな研究方向に進むための最初の一步として、これまでの金官加耶－空間的には洛東江河口の金海・釜山一帯、時間的には3世紀後半から6世紀－考古学の発掘成果とともに、それを基にした研究結果と諸論争について簡略にまとめてみよう。

1. 金官加耶に対する発掘調査の経過

(1) 日本による統治期

周知のように日本による統治期の歴史研究は、韓半島侵略と植民地支配の正当性を証明するための道具として利用されてきた。そのような観点から任那日本府や韓半島の文化的停滞を確認するため、諸加耶が存在したと考えられる嶺南各地において考古学調査が持続的に実施された²⁾。それ故に任那の核心といえる金官加耶に対する各種調査も活発に行われたと考えられるが、意外にも他地域に比べ調査内容が簡略であり知られていない。

* 1 韓国国立慶州文化財研究所特別研究員

* 2 島根大学法文学部

* 3 島根県立八雲立つ風土記の丘

* 4 雲南市教育委員会

日本による統治期に調査された金海・釜山地域における三国時代の遺跡は、金海貝塚と東萊貝塚といった生活遺跡、現在の亀山洞古墳群といった古墳に限られている³⁾。この他に朝鮮総督府が実施した正式な調査ではないが、釜山蓮山洞古墳群・田浦洞貝塚に対する遺跡調査も行われた(表1)。しかし、金海貝塚⁴⁾を除くと実際の調査内容はあまり知られておらず、特に貝塚の場合、いわゆる「金石併用期」に該当すると判断され、金官加耶との直接的な関連性はほとんど指摘されなかった。

古墳に対する調査については、1909年の谷井濟一による調査と1913年の鳥居龍蔵による金海貝塚周辺部に分布する古墳の現況調査が嚆矢となる。この2件の調査は簡単な記録とガラス乾板写真が残っているが、それを見ると古墳を直接発掘調査したのではなく、事前調査の性格が強かったようである。本格的な発掘調査としては1915年、黒板勝美によって行われた首露王妃陵付近の「既盗掘墳」

と「大円塚」の調査が挙げられる。この2つの古墳の調査内容は、毎日新報1915年7月22日及び24日付に「任那故地紀行」(上・下)として簡略に紹介されており、首露王妃陵の東にあったと古墳と推定される。調査過

表1 日本による統治期の金海・釜山地域における遺跡調査現況
(発:発掘調査、ガラス乾板は国立中央博物館所蔵)

調査日時	調査者	調査内容	ガラス乾板番号及び新聞記事
1904年	八木契三郎 柴田常恵	金海貝塚	
1907年	今西龍 柴田常恵	金海貝塚(発) 金海貝塚(発)	
1909年 12月	谷井濟一	金海貝塚(発)、 首露王陵、婆婆 石塔	90546~90547
1913~ 14年	鳥居龍蔵	金海貝塚(発)及 び周辺の古墳調 査	(古墳)130164~130172, 130207~ 130209, 130217, 130612 (貝塚)130173~130174, 130177~ 130196, 130198~130206, 130596~ 130600, 130602~130603, 130605~ 130611
1915年 6月	黒板勝美	金海貝塚(発)及 び首露王妃陵付 近の古墳(発)	(古墳)150707~150713 (貝塚)150714~150116 毎日新報大正4年7月22日付, 24日付
1916年	不明	首露王陵、首露 妃王陵	160538~160541
1917~ 18年	鳥居龍蔵	金海貝塚(発)、 歌谷山城、柳下 里古墳群	(古墳)170266~170269, 170215 (貝塚)170171~170194
1920年	濱田耕作 梅原末治 谷井濟一	金海貝塚(発)及 び三山里1号墳 (発)、金海古墳	(古墳)200025, 200038, 200034~ 200037(金海古墳)200040, 無200042 (貝塚)200026~200030, 200294~ 200326
1922年	藤田亮策 梅原末治 小泉顕夫	金海貝塚(発)	220001, 317-1~35-7~8, 325-2
1928年	不明	首露王陵	280194~280195
1928~ 29年	及川民次郎	釜山古墳群(蓮 山洞古墳群?) 28年発見, 29年 調査	釜山日報昭和4年8月15日付
1929年	及川民次郎 大曲春湖	田浦洞貝塚	朝鮮新聞昭和4年9月1日付 釜山日報昭和4年8月31日付
1929年	藤田亮策 小泉顕夫	東萊貝塚(発) /1927年発見	280166~280188, 290001~290006, 無 450-2~無450-3
1930年	小泉顕夫 及川民次郎	東萊貝塚(発)	無197-1~無197-16, M351-5, 7, 8, M365-8, M717-5, M795-03, 無1030-9, 無1093-3, M1123-22
1932	不明	金海貝塚	320525
1934~ 35年	榎本亀次郎	金海貝塚甕棺調 査(発)	171-1~19, 686-4~14, 954-1~20

程を撮影したガラス乾板を見ると、日本による統治期の一般的な封土墳調査方式と同様に封土の一部を切開後、埋葬主体部を調査したものと見られる。調査内容については明らかにされていないが、両古墳とも横穴式石室で

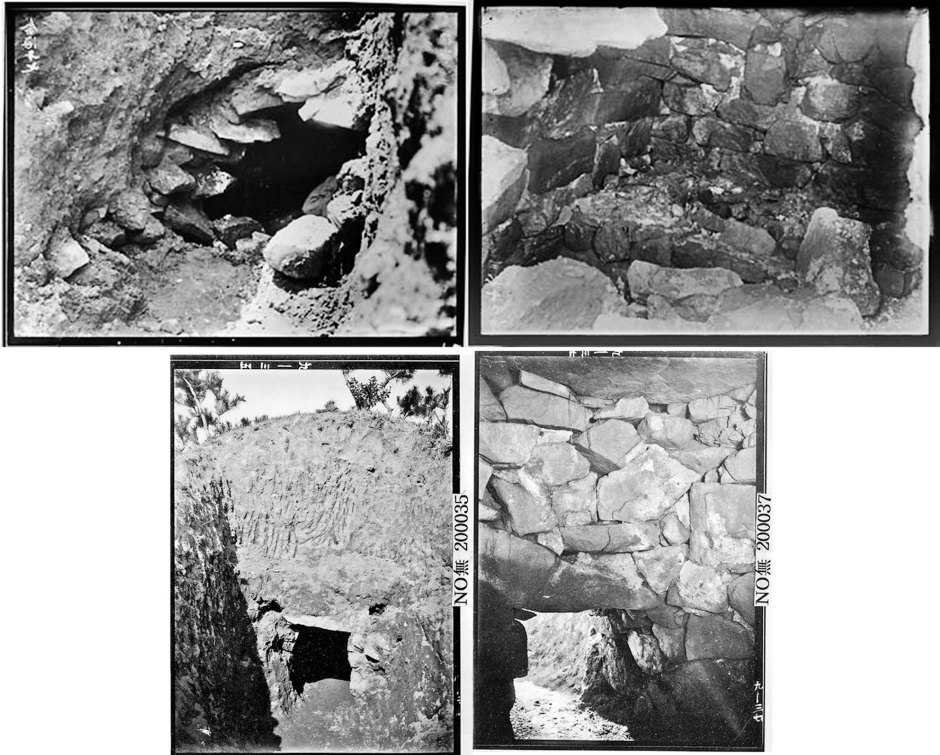


写真1 1915年調査古墳(上)と1920年調査三山里古墳(下)



写真2 金海柳下里一帯の古墳群(左:1917年170268、右:1920年無200042)

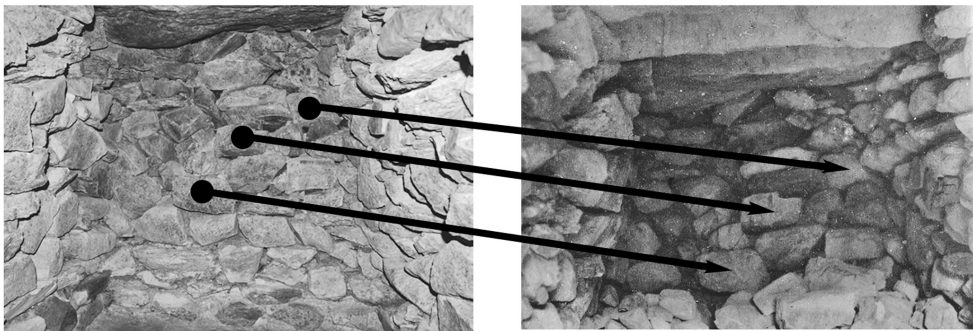


写真3 金海元支里M3号墳(略報告書p.30の写真24転載)とM200041の部分拡大

あり、壁面が石灰で装飾されていたことが分かる⁵⁾。

1920年には谷井濟一がいわゆる三山里1号墳と命名された古墳を発掘調査した。この古墳も1915年に調査された首露王妃陵付近の古墳と隣接し現在の亀山洞古墳群に属する。当時の調査成果は正式に報告されていないが、残されたガラス乾板の写真と1947年に刊行された梅原末治の『朝鮮古代の墓制』に図面と簡単な説明がある。以後、金海地域で古墳と関連する正式発掘調査記録はほとんど確認されていない。

以上から分かるように日本による統治期に調査された金海地域の封土墳はその大部分が統一新羅時代に該当する石室墓であったため金官加耶とは無関係なものであった。具体的な言及はないが、当時の日本人学者たちも類

似した考えを持っていたとみられる。特にこの時期に行われた高霊池山洞古墳群、昌寧校洞と松峴洞古墳群、咸安末伊山古墳群では膨大な量の遺物が出土して注目を集めた一方、金海地域の封土墳調査では遺物が少量出土したのみで大きな成果はなかったようである。このように当時、任那の実体を明らかにするために金海で実施された一連の古墳発掘調査は、他地域に比べて成果が微々たるもので、結果として金海地域の古墳調査の中止につながったのではないか。この点は1916年に発刊された『朝鮮古蹟圖譜』3巻の「任那」に首露王陵と首露王妃陵のみ紹介されている点でも傍証される。

しかし、現在の亀山洞古墳群以外に他の古墳群を確認するための努力が全くなされなかった訳ではない。現在残されているガラス

乾板写真のうち、1917年と1920年撮影分に「柳下里古墳群」と「柳下里石器時代遺跡周辺古墳」、「古墳全景」、「石室墳内部」などのタイトルが付いているものがある。この古墳群が現在どの古墳群に該当するかは明確に知ることができないが、1920年に撮影された「無200041」の「石室墳内部」は、最近調査された金海元支里M3号墳の石室を撮影したものであることが確実である(写真3参照)。しかし、この古墳群についても精密調査が実施されないまま、その後、金海地域における正式な古墳調査は終了したものと見られる⁶⁾。



写真4 東亜大学校博物館が調査した福泉洞1号墳及び金銅冠

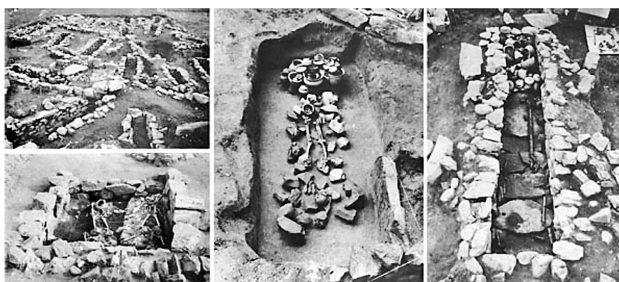


写真5 金海礼安里古墳群 (左上：調査全景、左下：5号墳、中央：117号墳、右：39号墳)

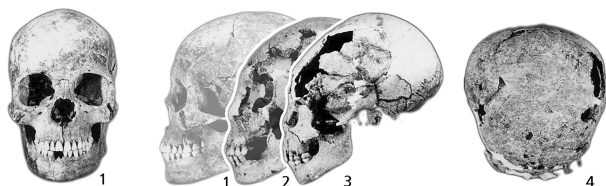


写真6 礼安里古墳群の正常人骨(1)と偏頭人骨(2~4)との比較 (1：129号墳、2・4：85号墳、3：140号墳)

(2) 1945年(光復)以後～1970年代

1945年の光復後から60年代後半まで金官加耶と関連した発掘成果はほとんど確認されていない。数少ない調査として50年代半ば、金海礼安里古墳群で竪穴式石槨墓3基が緊急発掘⁷⁾されたが、この調査も正式な報告は行われていない。1969～72年まで東亜大学校博物館が数回にわたって実施した釜山福泉洞古墳群の発掘調査は、金官加耶考古学に新たな道を開いたといえる。わずか10基に対する調査であったが、金官加耶の二大勢力の一つである福泉洞古墳群に対する認識を形作ったことに大きな意味がある⁸⁾。ただ、現在の編年観で4世紀代に属する10号墳を除くと調査資料のほとんどが5世紀前半から6世紀に該当し、首長級墳墓と考えられる大型墳墓が確認されていなかった点から金官加耶の全貌を把握するうえでは不十分な点があった。また、1号墳からは出字形金銅冠に代表される新羅文化の要素が強く確認されたため、この調査を契機とした金官加耶に関する考古学的研究は実質的な進展を見せなかった⁹⁾。

1970年代に入り、高霊池山洞古墳群を皮切りに加耶考古学の本格的な開始を告げる発掘調査が活発に行われた。金海・釜山地域においても中小古墳群が相次いで発掘調査され、釜山では71年の五倫台古墳群¹⁰⁾、72年の華明洞古墳群¹¹⁾、74年の福泉洞鶴巢台古墳群¹²⁾、75年の槐亭洞古墳群¹³⁾、金海では76～80年の礼安里古墳群¹⁴⁾などが代表的な事例として挙げられる。もちろんこれらの古墳群も支配者級の墳墓とは判断できなかったが、両地域が類似した物質文化と変動の様相を示していたという点で、金官加耶文化に関する新たな情報と変化過程を把握するうえで重要な根拠となった。

そのうち特に注目されるものは釜山大学校

博物館が計4回にわたって調査した礼安里古墳群である。この古墳群は4世紀から7世紀まで造営された木槨墓・石槨墓・石室墓・甕棺墓など多様な墓制が重複関係をなしており、金官加耶の葬制の流れを考える上で重要な手がかりを提供している。さらに、この古墳群から出土した様々な種類の土器は、金官加耶考古学の時間的物差しを設けるのにも大きな役割を果たした。しかし、何より重要なことは、文献記録に見られる「偏頭」が実際に確認された点である。これは文献記録の正確性を保証したということ以外にも、金官加耶に対する考古学的研究が古病理学的研究にまで広がったという点で注目すべきである。このように70年代後半に入り、金海・釜山各地での発掘調査が増加するとともに金官加耶の歴史を復元できる資料が本格的に確保されはじめた。しかし、依然として金官加耶首長層に関する情報は未確認のままであった。

(3) 1980～90年代前半

金官加耶考古学において1980～90年代は学史的に非常に重要な意味を持つ。それまで確認されていなかった金官加耶の首長墓が本格的に発掘調査されたためである。釜山大学校博物館と釜山博物館による福泉洞古墳群の発掘調査はその始まりを知らせる合図であった。福泉洞古墳群は80～90年代の計10回¹⁵⁾にわたる発掘調査で、既存の調査では確認されなかった甲冑¹⁶⁾や馬具類といった当時の最高階層のみが所有できた副葬遺物、さらに多様な考古資料が確認された。もちろん、80年代前半の調査では以前と同様5世紀代の資料が中心であったため、金官加耶の全盛期¹⁷⁾を把握できないという点で限界があったものの、このような問題点は継続的な調査によって補完された。特に21・22号墳、10・11号



写真7 福泉洞古墳群1次調査全景および出土遺物
(福泉博物館 2017: 74 一部改変)



写真8 大成洞29号墳(左)および古墳群出土交流関連遺物
(大成洞古墳博物館 2013 編集)

墳から出土した土器類や武器、武具、馬具は後述する金官加耶と高句麗の関係、金官加耶の新羅化過程に対する本格的な検討を可能とする資料となった。その後、この資料に関する様々なテーマの研究が行われ、金官加耶考古学はもちろん、加耶考古学研究創出の場と評価できるほど重要な位置を占めている。

90年代には金海地域でも大成洞古墳群と良洞里古墳群といった金官加耶の首長級古墳群が相次いで発掘調査され、金官加耶考古学の大枠が完成した。この二つの古墳群では90年代以前までほとんど知られていなかった4世紀代の多様な考古資料が確認されており、これにより金官加耶の始まりと全盛期を把握できたという点で大きな意味がある。特に、大成洞古墳群では4世紀代に該当する大型木槨墓から殉葬や馬具類などが多量に検出されたことから文献記録では確認できなかった金官加耶の威勢を推察できた。さらに、大成洞古墳群では中国東北地域から日本列島に至る広範囲な地域との交流を示す物質資料が出土したことから、鉄を媒介とする金官加耶

の国際的地位も示した。良洞里古墳群では大成洞古墳群に比べて階層は低いが、中間首長級の墳墓が多数調査された。また、日本列島との交流を示す広形銅矛、筒形銅器、土師器系土器などや甲、馬具、武器類が多量に出土したことから、金海大成洞古墳群を頂点とする金官加耶の位階構造を検討する上で重要な資料となった。

以上の首長級墳墓群以外にも70年代以降、金海各地の中小型墳墓群に対する調査も活発に実施された。まず、1984年度の退来里遺跡¹⁸⁾では木槨墓・石槨墓と

ともに甕棺墓が集中的に検出され、それまで金官加耶では知られていなかった墳墓の群集様式を確認した。七山洞遺跡では礼安里古墳群以来初めて、4～7世紀という長期間にわたって形成された墳墓群が調査された。また、生谷洞加達遺跡ではいわゆる昌寧式土器¹⁹⁾の金官加耶の流入とともに7段構成の板甲が出土し、金官加耶の社会構成の多様性を示す資料が増加した。このように80～90年代の発掘調査では、金官加耶の始まりの時期とその性格、全盛期と関連する物質資料が出土したことで金官加耶の内部構造や対外関係などを研究できる基盤が築かれた。

(4) 1990年代後半

90年代後半からは各種開発事業に伴って金海を中心に中小古墳群の調査がより活発に実施された。大成洞古墳群の北側に隣接した花亭遺跡²⁰⁾と杜谷古墳群²¹⁾は大成洞古墳群を頂点とする海畔川水系の集団関係を、ウイ徳亭古墳群²²⁾と陵洞古墳群²³⁾、金海望徳里遺跡²⁴⁾は古金海湾の西側にある長有一

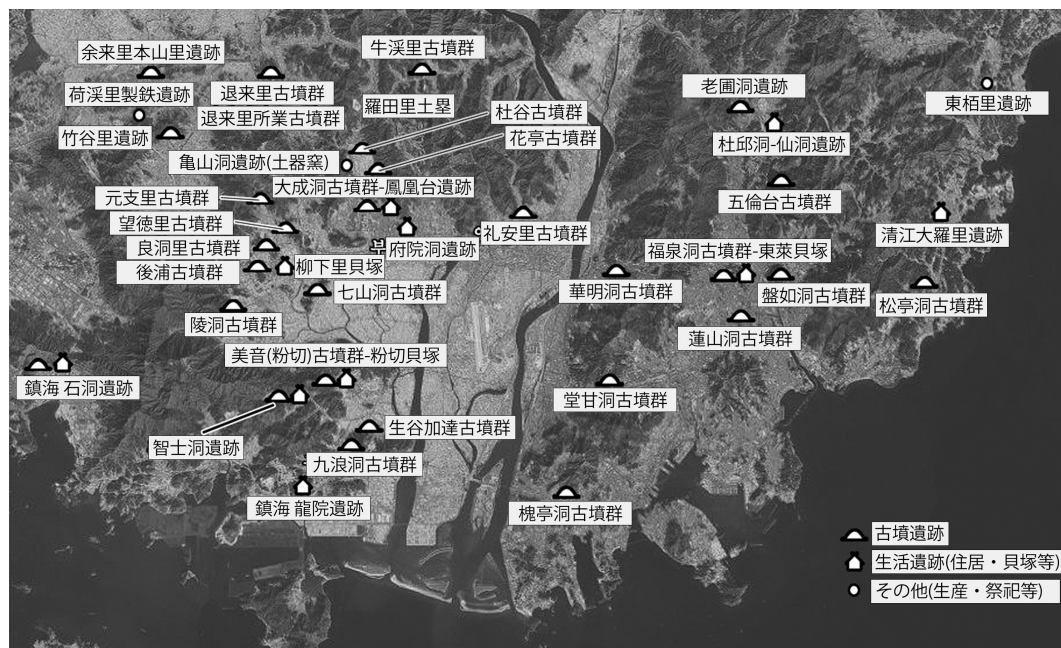


図1 金官加耶圏域主要遺跡分布図

帯の文化様相を把握できる資料となった。また、安養里古墳群²⁵⁾と牛溪里古墳群²⁶⁾は以前まで知られていなかった金海東北地域の物質文化を物語る資料となる。この他にも金海の西側に位置する進永盆地の本山里遺跡²⁷⁾、竹谷里古墳群²⁸⁾、本山里-余来里遺跡²⁹⁾は金官加耶内でも地域性を持つ物質文化圏が存在する可能性を示しているという点で重要である³⁰⁾。

釜山では福泉洞古墳群の持続的な調査以外に、機張を中心とする南東海岸一帯での発掘調査において多くの成果が得られた³¹⁾。その出土資料を見ると、金官加耶の文化圏が機張一帯まで大きな影響を与えていたことが分かる。つまり、90年代後半からは金海と釜山といった金官加耶の中核地域の他に周辺地域で新資料が出土したことから、金官加耶の領域または圏域問題とともに集団間の相互関係を研究できる資料が増加しはじめた。

しかし、何よりも注目すべきことは2000

年を前後に生活遺跡に対する調査が持続的に増加している点である。90年代まで金官加耶だけでなく加耶考古学における発掘成果の中心は墳墓とその出土遺物にあった。墳墓調査により得られた物質資料が諸加耶の社会像を明らかにし、加耶考古学の土台を築いたという点は否定できないが、加耶人の実際の暮らしはどのようなものであったかという疑問は、容易には解決されなかった。

2000年以前の鳳凰台遺跡・東萊貝塚・府院洞・北亭貝塚といった生活遺跡が報告されたものの大きな関心を得られず、また貝塚を中心に調査されたため金官加耶人の多様な生活の様子を復元するには限界があった。その後2000年以降、金海鳳凰台遺跡³²⁾・官洞里遺跡³³⁾・新文里-望德里遺跡³⁴⁾・釜山杜邱洞遺跡³⁵⁾・機張清江大羅里遺跡³⁶⁾・古村遺跡³⁷⁾など金官加耶圏域と考えられる複数の地域で集落および関連遺跡の調査が活発に実施され、金官加耶の日常生活を示す多様な物

質材料が得られた。さらに、進永荷溪里遺跡³⁸⁾、余来里遺跡³⁹⁾、釜山智士洞遺跡などの鉄生産遺跡は、完成品のみ確認された金官加耶の鉄文化を生産技術の側面から再検討できる資料となった。ただ、鉄文化と共に金官加耶を代表する華麗な土器文化の生産技術を把握できる窯遺跡の調査が極めて少ないという点はやや残念である⁴⁰⁾。しかし、東栢里遺跡⁴¹⁾といった祭祀と関連する遺跡、金海羅田里遺跡に代表される関防遺跡など様々な種類の遺跡と物質資料が報告されており、墳墓遺跡に加えて多様な種類の遺跡調査が今後急増するものと考えられる⁴²⁾。

2. 金官加耶考古学の流れと論点

(1) 研究の流れ

金官加耶に対する考古学的研究は発掘調査の成果を基に進められたため、発掘された物質文化の性格や蓄積の程度に応じて研究傾向に変化が見られる。このような点から研究内容によって金官加耶考古学の研究傾向は、大きく二つの時期に分けて見ることができる。

まず、1期は東萊福泉洞古墳群の発掘成果を通して金官加耶の衰退と新羅化過程を検討した時期で、90年代以前に該当する。この期間には金官加耶の遺跡が多数発掘調査されたが、その中でも福泉洞古墳群で出土した5世紀代の資料は、金官加耶首長層の変動過程をよく反映していた。しかし、それらの資料は金官加耶固有の独自性よりは新羅との関係を物語るものが大部分であり、自ずから金官加耶の衰退とその後の動向に対する論議が本格的に進んだ。

特に、当時の調査で出土した実戦用馬冑・木心鉄板被輪鍔・轡などの馬具類と縦長板冑・札甲などは騎馬と関連するもので高句麗に起

源を持つという点に注目し、広開土王碑に刻まれている庚子年の記事と結びつけた。また、福泉洞古墳群10・11号墳以降、副槨が無くなり土器文化が新羅化一色になったことから5世紀後半には「洛東江河口の加耶」は新羅の領域に編入されたと見た。この過程で加耶を親百済系加耶と親新羅系加耶に分ける概念が樹立され、考古資料から見ると金官加耶は5世紀初めから中葉に滅亡したという新たな見解が提示された⁴³⁾。朱甫暎が指摘⁴⁴⁾したようにこの時期における研究の最大の特徴は、広開土王の南征以降に金官加耶勢力が金海地域から福泉洞古墳群に移動したと判断⁴⁵⁾し、5世紀代の金官加耶の文化と衰退の過程を把握しようとした点である。

2期は90年代後半までで、金海大成洞古墳群と良洞里古墳群の発掘調査によって金官加耶の首長層とその全盛期であった4世紀代の物質文化が本格的に研究されはじめた時期である。80年代後半まで福泉洞古墳群の調査担当者もこの集団の政治体を金官加耶であると直接的に言及しなかったが⁴⁶⁾、三国時代の金海と釜山地域の文化的同質性は持続的に主張していた。しかし、金海地域における首長墓の不在という問題点は、金官加耶を復元する上で大きな弱点であった。その後、長い努力の果てに90年代初め、海畔川水系の大成洞古墳群と潮満江水系の良洞里古墳群が発掘調査されたことで、金官加耶の始まりと最盛期の4世紀の姿を窺うことのできる資料が得られ、従来把握できなかった金官加耶内部の政治的变化過程を考察する研究⁴⁷⁾がこの時期から本格的に行われた。

まず、金官加耶の始まりにおいて大成洞29号墳という以前には見られなかった卓越した墳墓の登場とともに、そこで出土したオルドス型銅鍔、金銅冠、陶質土器、殉葬など

を根拠に北方民族との関連性が指摘⁴⁸⁾された。これに対して様々な批判があったが、いずれにせよ当時新たに得られた物質資料を通して考古学的視点から金官加耶の始まりとその起源を検討したという点で重要な意味を持つと言えるだろう。また、この時期に出土した様々な威勢品から金官加耶は大成洞集団・福泉洞集団・良洞里集団の連合によって形成されたという見解⁵⁰⁾も登場し、金官加耶の内部構造に対する議論も活発に行われた。

もう一つ注目すべき点は大成洞古墳群を中心に出土した、いわゆる対外関係関連物質文化を通じた研究である。90年代以前まで金官加耶の対外関係に関する研究は、鉄を媒介とした貿易というテーマに集中していたが、90年代中後半以降は金官加耶から出土した交流関係遺物の検討が本格的に行われた。特に、既存のような大きな枠組みでの交易関係の確認でなく、交流関係遺物をさらに細分化して評価⁵¹⁾ - 中国東北地域との関係を示す各種馬具類と装身具類、日本列島と関係が深い各種青銅器類と倭系土器など - しようとする議論を深めつつ、東北アジア史的観点から金官加耶の交易を検討する研究が進められた。

金官加耶の衰退については以前と同じように、400年の高句麗軍の南征が最も大きな原因として指摘されたが、大成洞古墳群の首長墓築造中断と核心勢力の分散により、後期加耶と古墳時代中期の開始に大きな影響を与えたという、より拡張された意見が示された。このようないわゆる「南征論」に対する意見⁵²⁾も提示されているが、日本列島での初期須恵器出現⁵³⁾・金官加耶の衰退と西部慶南加耶諸国の発展⁵⁴⁾・高霊 - 陝川の木槨墓文化との類似性⁵⁵⁾などに対する多様な側面から補完が行われている。

金海地域における金官加耶関連遺跡の調査

成果を基にした上記のような研究とは別に、1期における福泉洞古墳群を中心とした金官加耶と新羅との関係に対する批判的研究も本格的に開始された。特に注目されるのは、墓制の変遷と墳墓の分布様相⁵⁶⁾、土器文化⁵⁷⁾、洛東江河口域集団の新羅服属過程⁵⁸⁾に対する再検討を通して、既存の福泉洞古墳群調査者たちの編年を批判し、さらに福泉洞古墳群が当初から金官加耶ではなく新羅であったことを指摘⁵⁹⁾した点である。これに対する批判⁶⁰⁾も提起されて、近年⁶¹⁾でも活発に進められているが、依然として平行線を辿っている。

以上のように、この時期の研究は活発な調査成果を基に金官加耶の開始と発展過程を検討し、その過程で多様な議論が展開されて金官加耶史研究を本格的な軌道に乗せたといえる。また、活発な交易関係の復元において金官加耶が嶺南の片隅に存在した小国ではなく、東北アジアにおける交易の中心地として位置づけた⁶²⁾という点で、この時期の研究成果が重要であるといえよう。

(2) 金官加耶考古学の論点

金官加耶考古学は90年代の発掘成果とともに大枠が形作られた。以後、新たな資料の追加を通して既存の学説を補強したり、取り扱うことができなかつた細部的な研究が進められたという進展があった。しかし、いまだに多くの部分で論争が続いており、特定のテーマにおいては論者たちの間で意見が続きざまに平行線を保ったまま各自の説を基準に深化している状況である。以下、金官加耶考古学で論争となっているいくつかのテーマについて簡略に調べてみよう。

1) 編年 (年代) 観問題

物質資料に時空間性を付与する作業は考古

表2 三国時代金海－釜山地域の編年現況

研究者 時期	申敬澈 (2013)	金斗喆 (2007)	朴広春 (2006)	李熙濬 (2007)	朴天秀 (2010)	洪濬植 (2014)	権鶴洙 (1993)	沈載龍 (2018)
250	3C 3/4		老31 礼60		大29			
300	3C 4/4	大29 良235	老31 礼74	七32 福(東)10	大59, 亀1 福80			大29
325	4C 1/4	礼160-74 老17	七11		大13-18 福38 亀6 福60	大59-52-55, 礼160-90-74 福80-84	礼31-68-74 福(東)10 老31 華5	礼160 大59-76 亀1
350	4C 2/4	大18-13 礼100-93 福38-69	七20	福25-26-35-36	亀15 福48-54-57	大1858-62-91-92, 亀55 礼99-92-77 福38-56-83		大91-18-13
375	4C 3/4	大2 礼138 福69- 60(主)-57	華2	福31-32-21-22	大1 福31-32	大13-23-68-70-88, 良49-62-89-19-22 礼118-109-138-151-93 福60-86-57-64-74	礼14-15-22-25 華2-7 福21-22・(東)4・(東)9	大2-94-70-47
400	4C 4/4	大39-3 礼117-133 福60(副)		福53-39 福10-11 福1(東)	福21-22 七20	大47-2-57-V-8 良24-27-59-90-91-97-340 礼86-117-130-133-148 福42-43-44-54-64-70-95- (東)10		大V-9-3-39 亀33
425	5C 1/4	福31-32 福35-35 福25-26	大1 福31-32-35-36- 25-26-93	七33 福21-22	福(東)5・(東)7	福10-11-53 加5 七33	大1-7-11 福93-31-32-35-36-25-26-41- 45-103-118-106	礼3-16-35-36-71 福10-11・(東)2・(東)6・(東)8 五3-4-9-16-28
450	5C 2/4	福21-22 福8-9 福10-11	福21-22 鶴1-1-1-2-3 福10-11-39	礼36	福4-23 蓮M4	福(東)1 礼36	福21-22-19-20-168・(東)4・ (東)9 福10-11-39-53-8-9 鶴1区1-3	
475	5C 4/4		福53 五9-10			福4-15 礼35	福171-166-141-142-120-30・ (東)8・(東)2-144-143・ 蓮M10-M3 美85-51-92	福8-19-21-26-27-28-32-41-62- 66-72 福(東)1・(東)5・(東)7
500	6C 1/4		礼39	德D11	礼57	竹99 林1-2 九4-5-6-8-16 梁山 夫婦塚、金鳥塚	礼38-39-43-44-46-54-57 德C13-D11	
550	6C 2/4		礼5			礼39-62-66 竹108 林5-12 九②2 北4#	550年以降 礼5-40-42-49-50-61 德C10-C22-D11-E15	

大(金海大成洞)、亀(金海亀旨路)、良(金海良洞里)、礼(金海礼安里)、七(金海七山洞)、竹(金海竹谷里)、福(釜山福泉洞、(東)東東大発掘)、鶴(福泉洞鶴果台)、蓮(釜山蓮山洞)、老(釜山老圃洞)、華(釜山華明洞)、五(釜山五倫台)、加(釜山生谷加達)、林(社谷洞林石)、德(釜山德川洞)、美(釜山美音洞)、九(釜山九浪洞)、北(梁山北亭洞)

学研究の第一歩といえる。特に時間性を付与する編年作業は物質文化の変遷を把握し、同時または共時的認知を証明して周辺地域との関係を考える上で優先的に進められなければならない。このことから年代を比定できる文献記録が十分ではない金官加耶の考古学的研究において物質資料を分析することで編年を作成して年代を与えようとする努力がこれまで進められてきた。既存の研究成果を考慮すると、金官加耶考古学の編年は特定の政治体に対するものにとどまるのではなく加耶・新

羅・倭といった当時の周辺地域の政治体とも深い関連があるため多くの研究者が心血を注いだ部分である。しかし、遺構間の相対的な前後関係はある程度類似点を見せているものの絶対年代の比定についてはまだ一致点が見出されていない状況である。

これまで知られている金官加耶考古学における編年観は大きく3つに要約できる⁶³⁾。まず、「資治通鑑」太康6年(285年)条の夫余に関する記事、広開土王碑の庚子年(400年)記事、七星山96号と馮素弗墓(415年)

出土の馬具、小林行雄による日本の古墳年代観などを基にした釜山-金海地域の研究者の見解⁶⁴である。二つ目は、埼玉稲荷山古墳から出土した辛亥年⁶⁵（461年ないしは531年）銘の鉄剣と年輪年代（平城宮 SD6030 下層、宇治市街 SD302 など）、火山灰年代（群馬県多田山 69 号竪穴）など近年の古墳時代研究の年代観に基づく見解⁶⁶である。最後に、最初の馬具編年を見直し、太王陵で出土した馬具から皇南大塚南墳を奈勿王陵、高句麗太王陵を故国壤王陵に比定する新羅古墳の編年を基準に、金官加耶の編年を考える見解⁶⁷である。以上の年代観は単なる一つの年代ポイントに対する違いを示すのではなく、三国時代の嶺南地域の歴史的動向を吟味する方法とも密接な関係があるため、研究者間の合意点は見つかっていない。

筆者は基本的に1つ目の年代観に従っているが、ここで特定の年代観の是非を問うのは難しいといえる。ただし、どのような観点から金官加耶の編年を見ても、これまでに提示されてきた年代観は外部資料や文献史料に依存しすぎていることに基本的な問題があることを指摘しておきたい。この場合、参考地域の年代観が変われば、既存の年代観とそれによる解釈すべてに歪みが生じるため、金官加耶の考古学研究の基礎は安定感を失わざるを得ない。これは、古墳時代の年代観について異なる立場を取っている、1つ目と2つ目の見解でも確認できる。

そして、遠距離、それも生産と消費の単位から外れた地域から出土した遺物の形態的類似性に基づいて並行関係を設定し、これを同じ年代に比定することは物質資料の持つ様々な歴史的意味を無視することにはかならない。したがって、外部資料を基準にしなければならぬのであれば、対象物質資料が持つ

様々な側面からの整合性と歴史的意味を綿密に検討した上で、一つの可能性として提示しておいた方が良いと思われる。そして、同一の生産-消費圏から出土するものを基準に、交差編年を通じて年代適用範囲を拡大して編年を組み立てる必要がある。

金官加耶考古学において一般的に用いられている文献史料に基づいた物質資料の年代把握も、文献史料の厳格な批判の下で行われたものではない。これについて文献史研究から、前後の脈絡を考慮せず考古資料の様相に合う特定の記録のみを用いているという指摘を受けている。しかし、何より大きな問題は、文献による年代比定は常に政況的情况に依存せざるを得ないという点である。金官加耶考古学、ひいては加耶考古学において年代比定に用いられる年代関連史料は、墓の築造や寺院建立といった明確な年代を持つというよりは、長期間にわたって行われた事実であるため、物質資料のある時点を明確に示すことができない場合も多い。このため、ある事件の最終あるいは最初の時点として記録された年代を、物質資料のピンポイントの年代として用いると多くの問題点を内包することになる。さらに、物質資料はある出来事の完結した状態の資料ではないため、型式学的あるいは層位学的に文献資料に基づく年代よりも古い時期の遺物が登場する可能性を常に念頭に置いておく必要がある。

このような側面から、考古資料の編年や年代比定のために最良の資料は、武寧王陵のように物質資料そのものと、文献史料の両方から明確な年代が確認できるものである。もちろん、その年代が決まったからといって、前後の物質資料の年代が自動的に定まるわけではない。これは、物質文化がどの程度の時間幅を持っているか明確でない場合が多いた

めである。しかし、金官加耶考古学では、特定の年代を基準とした機械的編年を積極的に活用している。つまり、文化は常に流動的な時間幅を持っている－むしろ時間幅が適用できない可能性もある－にも関わらず、12.5、25、33.3、50年など同一の時間間隔で文化を裁断し、これが絶対年代であるかのように扱う雰囲気が暗黙的に認められている。こうした点も今後の編年-年代研究において再考すべき点である。

2) 金官加耶と北方文物の問題

大成洞古墳群の発掘調査をきっかけに金官加耶成立期と全盛期の資料が大量に得られたことは周知のとおりである。これに基づいて申敬澈は金官加耶の始まりに北方民族、具体的には夫余族の関与があったと主張した⁶⁸⁾。この主張に対し、江上波夫の「騎馬民族征服説」と同一視したり、多様な見地からの批判と再反論が加えられた。しかし、近年調査さ

れた大成洞91号墳と88号墳⁶⁹⁾では、中国東北地方－具体的には三燕－と関連する資料が多数出土し、むしろ金官加耶と北方民族との関連性がより一層強く結びつけられるようである。

ただし、大成洞古墳群から出土する北方地域の物質文化を「夫余族」という特定集団と関連づけるよりは、中国東北地方というより広い地域を念頭に置く必要があり、一部資料の場合、中原との関連性も考慮しておく必要があるだろう。また、最新の資料を考慮して、特定時点での単発的な影響ではなく、一定期間に複数回の影響があった可能性も検討しなければならないだろう。

問題は、影響という用語を従来の解釈のように「人間の移動」という側面から見るかどうかという点である。これまでの資料から見る限り、3世紀後半から4世紀前半まで中国東北地方の物質文化が韓半島の中部地域をほぼ経ず金官加耶に入ってきたことは明らかで

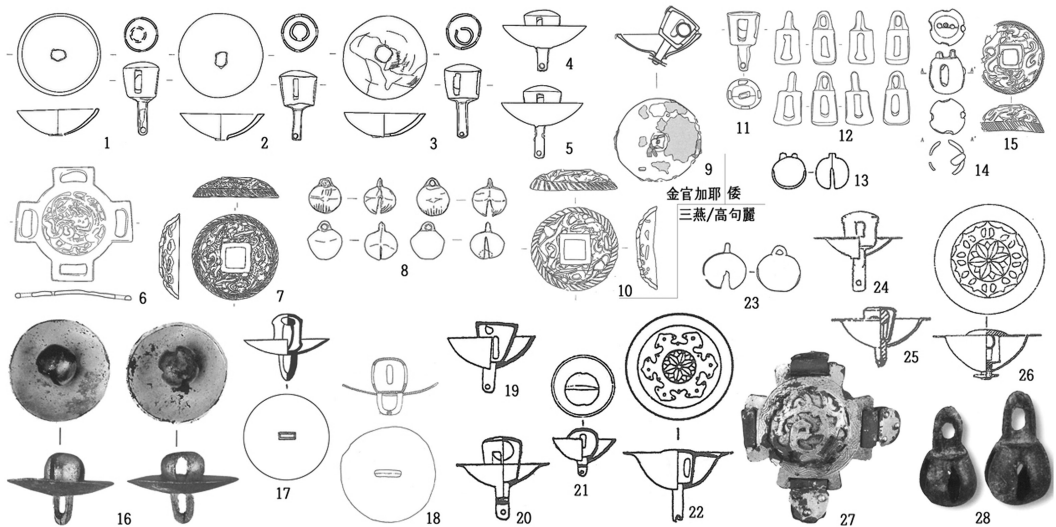


図2 金官加耶および倭出土三燕・高句麗地域の馬具類
(スケール不同、趙晟元 2017 から転載)

1～8. 大成洞91号墳, 9. 大成洞93号墳, 10. 大成洞70号墳, 11～13. 京都大学総合博物館, 12. 北海道大川遺跡 GP50 土墳墓, 14・15. 伝嶺山古墳, 16・17. 吉林万宝汀 242 号墓, 18. 吉林榆樹老河深中層 67 号墓, 19～23 朝陽袁台子壁画墓, 24. 安陽孝民屯 154 号墓, 25・26. 朝陽十二台 88M1 号墓, 27. 太王墓, 28. 集安洞溝山城下 152 号墓

ある。しかし、既存の研究成果のように北方民族の移動による受動的な文化受容なのか、北方文化との持続的接触による能動的な文化受容なのかについてはより綿密な検討が必要であり、当時の歴史的状況も十分に考慮しなければならないだろう。

3) 南征論と金官加耶の帰属問題

「南征論」⁷⁰⁾と呼ばれるほど、400年の高句麗軍南征は金官加耶考古学に欠かせないテーマであり、これまで多くの議論を呼び起こしている。前述したように、4世紀代に成長しつづけた金官加耶が高句麗軍の攻撃を受けて中心勢力が崩壊し、その勢力が嶺南各地はもちろん日本列島まで散開し、これによって前期加耶から後期加耶への転換、古墳時代前期から中期への転換が起こるということが核心内容である。南征論が金官加耶考古学で初めて登場したのは、1980年代の福泉洞古墳群の調査で高句麗の騎馬文化と関連した馬冑、轡、甲などの馬具類が出土してからである。その後、大成洞古墳群の調査で大型墳の築造中断時点が400年を前後した時点であることと相まって、その論旨を補完することになる。

南征論については、多様な批判が提起されたが、その中でも金官加耶主勢力の移動を通して勢力再編に対する指摘⁷¹⁾が最も代表的である。要約すると、敗退勢力による政治再編が可能なのかという指摘である。このような指摘は一見妥当であるが、5世紀前半以降、加耶各地と日本列島で確認される新たな物質文化は明らかに金官加耶と密接な関連がある。しかし、これを400年という一時的な時点で行われたのかについては注意を払う必要がある。これまでの物質資料から見ると、4世紀後半の時点で金官加耶には嶺南内陸と日

本列島など様々な地域と密接な交流関係を形成していたためである。つまり、400年の高句麗軍南征と金官加耶の敗北が一つの象徴的な事件であり、以前の時期から維持されてきた交流関係を基に金官加耶の先進文物⁷²⁾が周辺に拡散したのではないかと考える。もちろん、このような状況において従来の南征論で述べられた土着勢力が受動的であるというニュアンスは再考の余地がある。おそらく各地域の土着勢力は南征以前まで金官加耶が独占していた先進文物を積極的に受け入れながら、自分たちの状況に合わせて、これを変化させながら発展を図ったのであろう⁷³⁾。

むしろこのような問題よりは、なぜ金官加耶は南征以後、基盤地域である金海で再建できなかったかを論理的に説明する必要があるのではないかと考える。南征直前の4世紀後半になると金官加耶の物質文化は最大範囲に達し、金海内でも集団分化が進んで多くの古墳群が新しく造営され、金官加耶は最全盛期に至る。そのような時点で高句麗軍との戦争により全ての基盤を失ったということ自体が理解しがたく、最後の王墓である大成洞1号墳の時期が南征直後という解釈も曖昧である。つまり、最大の原因を南征に触発された別の理由から求めるのがより適切かもしれない⁷⁴⁾。

金官加耶の帰属問題は福泉洞古墳群を新羅と見るべきか否かという点と密接に関連する。この点に関して南征以降5世紀の金官加耶の動向については、大成洞古墳群の没落以後、金官加耶の中心地が福泉洞古墳群に移り、5世紀中頃以降新羅の領域に入るという見解⁷⁵⁾と蓮山洞古墳群の造営が中断する6世紀中頃まである程度独自性を維持したという見解⁷⁶⁾、当初から新羅であったと把握する見解⁷⁷⁾がある。これらを整理すると、前述

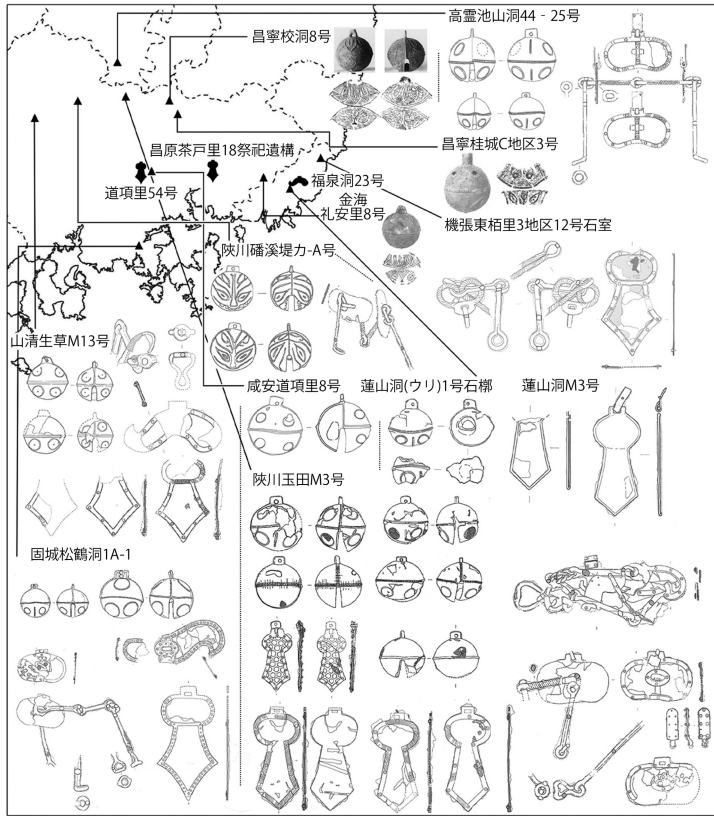


図3 剣菱形杏葉及び人面文銅鈴の分布状況
威勢品の一部は依然として加耶地域と密接な関連があることが分かる（趙晟元 2018 より転載）

の二つの見解は事実上同じであり、新しい時期に新羅に編入されるという見解と、最初から新羅であったという見解が対立している状態である。実際、福泉洞古墳群の物質資料を検討すると、4世紀代の大成洞古墳群と密接な関連を有することは周知の事実である。最も代表的なものが土器文化であり、この他にも筒形銅器といった儀器なども重要な根拠の一つである。しかし、既に何度も指摘されているように慶州地域の物質文化も部分的に受け入れているため、一つの側面だけを浮き彫りにすることは容易ではない。

しかし、このような問題は物質資料の解釈そのものではなく、無意識的に大成洞古墳群や新羅という大勢力の枠の中で福泉洞古墳群

を解釈しようとするために生じると考えられる。実際、4世紀代の福泉洞古墳群は交流関連遺物を除くと甲冑、馬具、鉄鋌など首長級の墓から出土した遺物は他地域に劣るものではないため、独自の勢力圏を十分形成することができる。また、5世紀前半までは福泉洞古墳群で慶州地域とほぼ同時またはより古い時期に装飾大刀や金銅冠などの威勢品が確認されている。これは慶山やその他の新羅圏に入った勢力とは明確な違いである。このような点は、6世紀代の蓮山洞古墳群で出土した威勢品が新羅はもちろん、加耶地域とも関連性

を持つという点からも認められる。このように福泉洞古墳群に代表される釜山の集団は、4世紀にも5世紀前半にも独自の力を持った勢力であるため、それ自体を認める必要があり、その後6世紀のある時点までも土着勢力に対する再評価が必要であると考えられる。

おわりに—今後の課題—

文献記録の乏しい金官加耶の研究において考古学の占める比重は非常に大きく、約50年間の発掘成果に基づき考古学的研究成果を持続的に挙げている。しかし、これまでの研究成果はそのほとんどが古墳群調査により得られた資料を活用したものである。金官加耶

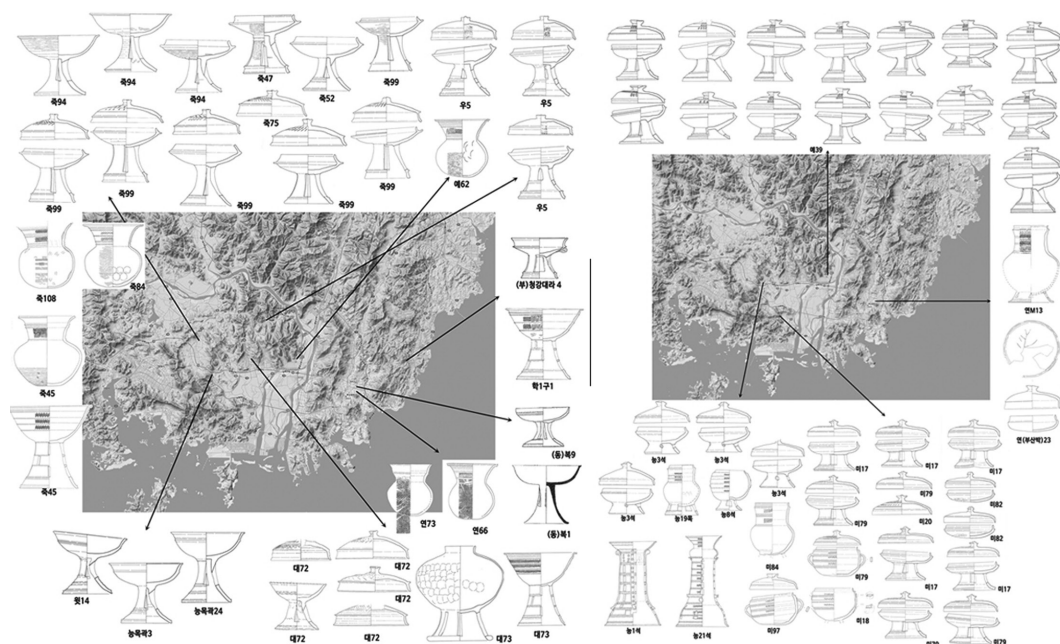


図4 5世紀代の金官加耶一帯における外来土器の分布
(左：小加耶式土器、右：大加耶式、縮尺不同)

考古学における古墳出土資料の重要性は言うまでもないが、社会文化という側面から考えると古墳はその一部に過ぎないということに肝に銘じなければならない。つまり、近年増加している多様な生活遺跡資料を活用することで金官加耶人を復元するための努力が必要である。

そして、これまで大成洞古墳群を中心に金官加耶の没落を5世紀前半と見るのが金官加耶考古学の暗黙の同意だった。そのため、大型古墳が造営され続けていた釜山は持続的に研究が進められたが、金海地域の5世紀の文化がいかなるものであったかはほとんど検討されていない。しかし文献記録からも分かるように、6世紀前半頃、金官加耶が新羅に編入されることは確実である。近年の調査資料を見ると、5世紀代の金海地域では釜山地域とは全く異なる文化様相が確認されている。例えば、土器文化をみると、4世紀代のよう

な独自性は明らかではないが、様々な地域との交流をはっきりと見て取れる。なかでも小加耶土器と大加耶土器のように新羅の中心や釜山地域ではあまり見られない土器が金海ではかなり確認できる(図4)。これは大成洞古墳群のように巨大な首長墓がなくとも中小古墳群を築造した集団は加耶の諸地域と独自の交流を行っていたことを物語っている。これを単純に扱うことは容易ではないが、5世紀代の金官加耶に対する考古学的再検討が必要であることは明らかである。

最後に、これまで金官加耶考古学は大成洞古墳群、福泉洞古墳群、良洞里古墳群など最高首長級集団の資料のみを重視してきた傾向がある。確かに最上位階層(集団)の物質文化は社会内部の権力構造や他地域との交流などを明らかにするには有用である。しかし、圏域内には1つの中心集団のみが存在するのではなく、数多くの集団が互いに関係を結ん

でいるため、集団間の位階はもとより多様な側面からの相互関係を検討して、圏域を維持して運用するためのシステム把握が先行されなければならないだろう。そうした点から金官加耶考古学は上記の三集団間の関係以外にその内部に存在した多様な集団間の関係の検討が不足していたことは否めない。さらに、集団内部の序列関係に重点が置かれているが、個々人の職能とその社会的役割といった部分も未検討であることは事実である。

以上の問題点以外にも、先ほど見たように金官加耶考古学は他の様々な地域の研究成果とかせ糸のように絡み合っている。また、異見が出された部分について合一点を見いだせず、長らく議論が膠着状態に陥っているのも事実である。おそらく決定的な証拠が確保されない限り、金官加耶をめぐる様々な論争は容易には解決しないだろう。しかし、前述した大きな論争の渦に巻き込まれ、考古資料から復元できる金官加耶の多様な文化を放置するならば、金官加耶考古学の未来はないかもしれない。金官加耶史の量的・質的豊かさのためにはこれまで扱わなかった多様な視点からのアプローチが必須となろう。

付 記

本書の内容は概ね 2017 年までの発掘調査と研究成果に基づいている。そこで扱えなかった部分と 2018 年以降の研究成果について若干付言しておきたい。金官加耶の集落については朴永民、5 世紀の土器文化については裴孝元の論考（朴永民 2013、裴孝元 2017）が発表され、既存の金官加耶考古学ではあまり注目されなかったテーマを扱っている。そして、近年発表された金一圭の研究（金一圭 2018）は金官加耶出土の中国系遺物を詳細に

検討し、既存の説を批判的に考察しており注目される。2018 年以降は加耶史研究の活性化とともに、研究史の検討と今後の方向性に関する様々な発表が多数行われ、金官加耶研究の流れを把握するうえで大いに役立つ。この他にも筆者の能力不足により本稿では触れられなかった多くの研究成果があるが、今後の補完を約束することでご了承いただきたい。

本稿は 2018 年に韓国古代史学会主催の『加耶各国史研究動向と課題』において発表した内容を修正補完したものである。

註

- (1) 朱甫暉 2017 『加耶史を新しく読む』 周留城
- (2) これについては、嶺南考古学会編 2013 『日本による統治期の嶺南地域における古蹟調査』 学研文化社で詳細に述べられている。
- (3) この他に金海において行われた三国～統一新羅時代の遺跡に関する調査は、金海柳下里古墳群の分布調査と出土地が不確かな古墳出土遺物に関するものがある。
- (4) 結論的に金海貝塚は金石併用期という有史以前と認識されたが、鳥居龍蔵は三国時代まで存続した遺跡とみている。李基星 2010 「日本による統治期「金石併用期」に対する一考察」『韓国上古史学報』第 68 号
- (5) 「任那故地紀行」では天井に石灰が塗られており、その石灰の中に貝片が見えるとされていることから天井も石灰で塗装されていた可能性が高い。
- (6) 2018 年発表当時、討論者であった沈載龍は大成洞 70 号墳の盗掘坑から出土した日本による統治期の硬貨を通して当時も大

成洞古墳群に対する認識があったであろうと指摘している。まず、この硬貨は昭和6年(1931年)のもので、盗掘は少なくとも金海地域の正式古墳調査が終了した後に起こったものである。もう一つ指摘したいのは、日本による統治期の古墳調査はおおよそ封土墳ないしは破壊墳が多いという点である。つまり、肉眼上明確に確認されていない墳墓の調査、つまり封土が残っておらず平面削土後、墓壙線と土層で確認しなければならない木槨墓に対する調査は、当時の調査技術ではほぼ不可能であったろう。大成洞古墳群が位置する場所で多くの遺物が出土するという認識があったのかもしれないが、技術的な問題によって正式調査につながらなかったと考える。

- (7) 釜山大学校博物館 1985『金海礼安里古墳群』I、p.1
- (8) 東亜大学校博物館 1971『東萊福泉洞第一号古墳発掘調査報告』、1984『上老大島・付: 東萊福泉洞古墳・固城東外洞貝塚』
- (9) 報告者は釜山地域が加耶や新羅ではない独立的な勢力であったことに言及している(東亜大学校博物館 1971 前掲書; 1984 前掲書)。
- (10) 釜山大学校附属博物館 1973『五倫台古墳発掘報告書』
- (11) 釜山大学校博物館 1979『釜山華明洞古墳群』
- (12) 釜山大学校博物館 2001『東萊福泉洞鶴巢台古墳』
- (13) 鄭澄元 1983「釜山槐亭洞古墳群発掘調査概要」『釜山直轄市立博物館年報』6、釜山市立博物館
- (14) 釜山大学校博物館 1985 前掲書、釜山大学校博物館 1993『金海礼安里古墳群Ⅱ』
- (15) 次数が付いた福泉洞古墳群の発掘調査

は2008年まで計8次で、個別回数は18回でここでは回数を基準にした。

- (16) 東亜大学博物館が調査した内容にも頸甲などの甲冑類が確認されており、8号墳出土品のうち鉄鋌と報告されたものの一部(東亜大学校博物館 1984 前掲書、p.316 図面20の14~18)も札甲である。
- (17) 当時調査した福泉洞古墳群の報告書の中で最も古い時期に出た『東萊福泉洞古墳 I -10・11号墳』では直接的に金官加耶という言葉及よりは「洛東江下流域の加耶」と呼んでいる。
- (18) 成均館大学校 1989『金海退来里遺跡』
- (19) 朴天秀 1993「三国時代昌寧地域集団の性格研究」『嶺南考古学報』13
- (20) 福泉博物館 2004『金海花亭遺跡』I、福泉博物館 2009『金海花亭遺跡』II
- (21) 釜慶大学校博物館 1998『杜谷遺跡発掘調査結果(略)報告』
- (22) 慶星大学校博物館 2001『金海ウイ徳亭遺跡』
- (23) 蔚山大学校博物館 2001『金海陵洞遺跡』I、2012『金海陵洞遺跡』II
- (24) 東西文物研究院 2015『金海望德里遺跡』
- (25) 慶南文化財研究院 2004『金海安養里古墳群』
- (26) 慶南文化財研究院 2012『金海牛溪里遺跡』
- (27) 慶南発展研究院 2004『金海本山里遺跡』
- (28) 東亜細亜文化財研究院 2009『金海竹谷里遺跡 I』、2009『金海竹谷里遺跡 II』
- (29) 韓国文化財財団 2014『金海本山里・余来里遺跡 I~III』
- (30) 最近報告された昌原石洞遺跡も金官加耶の物質文化と高い類似性を見せている。三江文化財研究院、2010『鎮海石洞遺跡』、東亜細亜文化財研究院 2017『昌原石洞複

- 合遺跡 I～VI』
- (31) 釜慶文物研究院 2014 『機張佳洞古墳群 上・中・下』
- (32) 慶南考古学研究所 2007 『金海鳳凰洞遺跡』、慶南発展研究院歴史文化センター 2013 『金海加耶人生活体験村造成敷地内遺跡 II』、2013 「金海会峴洞消防道路区間内遺跡』
- (33) 慶南考古学研究所 2000 『金海官洞里三国時代津址』
- (34) 東亜細亜文化財研究院 2013 『金海望德里・新文里生活遺跡』、ハンギョレ文化財研究院 2015 『金海新文里遺跡』
- (35) 東亜細亜文化財研究院 2018 『釜山杜邱洞聚落仙洞・トゥドゥリゴル墳墓群』
- (36) 慶南文化財研究院 2011 『機張清江・大羅里遺跡』
- (37) 慶南文化財研究院 2009 『古村遺跡 I 地区』、2011 『古村遺跡』、東亜細亜文化財研究院 2010 『釜山古村里生産遺跡(上)・(下)』
- (38) 東亜細亜文化財研究院 2009 『金海荷溪里遺跡』
- (39) ウリ文化財研究院 2009 『金海余来里遺跡』
- (40) 金海亀山洞遺跡では 4 世紀後半に属する土器窯が 1 基確認された(慶南考古学研究所 2010 『金海亀山洞遺跡』)。海盤川を境に反対側には亀山洞窯遺跡(東亜大学校博物館 1999 『金海亀山洞遺跡』)があるため、周辺一帯に長期におよぶ土器生産遺跡が存在したが、開発によってすでに破壊された可能性が高い。
- (41) 慶南文化財研究院 2014 『機張東栢里遺跡』。沈載龍は討論当時、金海羅田里遺跡との類似性を挙げて東栢里遺跡が槽である可能性を指摘した。東栢里遺跡の立地や遺構の状態を考慮するとその可能性は否定できないが、軍事的性格の遺物が少ない点から一旦既存のように祭祀的機能を優先しておきたい。
- (42) このほかに 2000 年以降に行われた大成洞古墳群の数次におよぶ調査では 5 世紀第 3 四半期に対応する 73 号墳(竪穴式石槨墓)が確認され、高句麗軍南征以降、金官加耶の文化を把握できる資料が確認された。また、91 号墳と 88 号墳では晋式帯金具、ローマングラス、巴形銅器、筒形銅器など東北アジア各地の遺物が出土しており、金官加耶の国際性がより鮮明となった。大成洞古墳博物館 2011 『金海大成洞古墳群 - 68 号墳～72 号墳 -』、2015 『金海大成洞古墳群 - 70 号墳主槨～95 号墳 -』、2015 『金海大成洞古墳群 - 85 号墳～91 号墳 -』
- (43) 釜山大学校博物館 1983 『東萊福泉洞古墳群』 I、申敬澈 1989 「三韓・三国・統一新羅時代の釜山」『釜山市史』第一巻、崔鍾圭 1983 「中期古墳の性格に対する若干の考察」『釜大史学』第 7 輯
- (44) 朱甫暉 1997 「4～5 世紀釜山地域の政治的方向」『福泉洞古墳群の再照明』釜山広域市立福泉博物館、pp.77～78。
- (45) 申敬澈 1995 「金海大成洞・東萊福泉洞古墳群点描」『釜大史学』19
- (46) 代表的なものとして申敬澈 1989 前掲論文では金官加耶という用語をほとんど使わず「釜山・金海の洛東江下流域の加耶」と呼んでいる。考古学において「金官加耶」が活発に使われるようになったのは、1990 年代半ば、大成洞古墳群と良洞里古墳群が発掘されてからである。
- (47) 洪漣植 2000 「考古学から見た金官加耶」『考古学から見た加耶』韓国考古学会
- (48) これについては申敬澈の諸論文があるが、中でも申敬澈 2000 「V. 調査所見」『金

- 海大成洞古墳群 I』慶星大学校博物館を参照した。
- (49) 崔鍾奎 1994『考古学的に見た 3・4 世紀の韓国嶺南地方』『古代東亞細亞の再発見』湖岩美術館、pp.184～185、申勇旻 2000「弁・辰韓地域の外来系遺物」『考古学から見た弁・辰韓と倭』嶺南考古学会・九州考古学会第 4 回合同考古学大会、pp.8～12
- (50) 申敬澈 1995「金海大成洞・東萊福泉洞古墳群點描」『釜大史学』19
- (51) 安在皓 2005「韓半島から出土した倭関連文物 -3～6 世紀を中心に-」『倭五王の問題と韓日関係』京仁文化社、井上主税 2006『嶺南地方出土倭系遺物からみた韓日交渉』慶北大学校文学博士論文、井上主税 2014『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』学生社、沈載龍 2016「金官加耶の外来系威勢品受容と意味」『嶺南考古学』74、趙晟元 2017「4 世紀金官加耶の対外関係検討」『考古広場』21
- (52) 朱甫暉 2006「高句麗南進の性格とその影響 - 広開土王南征の実像とその意義 -」『大邱史学』82
- (53) 申敬澈 2006 前掲論文
- (54) 趙榮濟 2006『西部慶南加耶諸国の成立に対する考古学的研究』釜山大学校大学院博士論文
- (55) 金斗喆 2013「加耶轉換期の墓制と継承関係」『考古広場』第 13 号
- (56) 崔秉鉉 1992『新羅古墳研究』一志社
- (57) 金龍星 1996「土器による大邱・慶山地域古代墳墓の編年」『韓国考古学報』35、李熙濬 2007『新羅考古学研究』社会評論などが代表的である。
- (58) 李熙濬 1998「金海礼安里遺跡と新羅の洛東江西岸進出」『韓国考古学報』39、1999「新羅の加耶服属過程に対する考古学的検討」『嶺南考古学』25
- (59) 金大煥 2003「4～5 世紀洛東江流域の地域集団」『新羅古墳の地域相』第 12 回嶺南考古学学会学術発表会 崔秉鉉、金龍星、李熙濬も基本的に同じ立場に立っている。
- (60) 金斗喆 2003「釜山地域古墳文化の推移 - 加耶から新羅へ -」『港都釜山』19 卷
- (61) 嶺南考古学会 2014『新羅と加耶の境界』嶺南考古学会創立 30 周年記念第 23 回定期学術発表会
- (62) これは大成洞古墳博物館が調査した近年の大成洞古墳群の発掘成果でも顕著に確認される。
- (63) 申敬澈 2006「陶質土器と初期須恵器」『日韓古墳時代の年代観』国立歴史民俗博物館・韓国国立釜山大学校博物館
- (64) 申敬澈 2000「金官加耶土器の編年 - 洛東江下流域前期陶質土器編年」『加耶考古学論叢』3、金斗喆 2007「三国 - 古墳時代の年代観」『韓日三国・古墳時代の年代観Ⅱ』韓国国立釜山大学校博物館・国立歴史民俗博物館、洪潛植 2014「新羅・加耶古墳交差編年」『嶺南考古学』第 70 号
- (65) この干支については 461 年説と 531 年説があるが、この年代観では 461 年として取り扱う。
- (66) 朴天秀 2010「新羅加耶古墳の暦年代」『韓国上古史学報』第 69 号
- (67) 李熙濬 1995「慶州皇南大塚の年代」『嶺南考古学』17:2007 註 58 の本
- (68) 申敬澈 2000 前掲論文
- (69) 大成洞古墳博物館 2015『金海大成洞古墳群 -85 号墳～91 号墳-』
- (70) 南征論という用語はこれを批判する研究者たちによって命名されたものであるが、本稿では一つの解釈論を略称する意味

- で使用する。
- (71) 朱浦暲 2006 「高句麗南進の性格とその影響: 広開土王南征の実相とその意義」『大邱史学』82
- (72) 物質資料と共にそれを製作する技術、運用する社会システムなど金官加耶の社会政治文化全体を意味する。
- (73) 400 年を前後して確認される物質文化の交流には模倣と大量生産 - 例えば、初期須恵器、大加耶の初期墓制 (金斗喆 2013 前掲論文) など - が多い。これは 4 世紀代に完成した物質の移動という交流形態とは違いがあり、これが土着勢力の積極的な受容姿勢と関係があると考えられる。
- (74) これはもはや金官加耶が交易の中心地としての役割が担えなくなったためであると考えられる。5 世紀前半から金海地域ではそれまでの北方系遺物と倭系遺物がほとんど確認されていない。倭系遺物については、南征の打撃による倭の対外政策に対する基調の変化とも関係するかもしれないが、新たな交易ルートと対象を探ろうとする倭の意図的な対外政策と関連が深いと考えられる。これは近年、南海岸一帯で確認される 5 世紀前半代の倭系物質資料からも証明される。
- (75) 申敬澈 1995 前掲論文
- (76) 金斗喆 2017 「蓮山洞古墳群と古代釜山」『港都釜山』34
- (77) 金大煥 2003 前掲論文; 李熙濬 2007 前掲論文。この他にも崔秉鉉、朱甫暲も同じ主張をしている。
- 金大煥 2003 「4 ~ 5 世紀洛東江下流域の地域集団」『新羅古墳の地域相』第 12 回嶺南考古学会学術発表会
- 金斗喆 2003 「釜山地域古墳文化の推移 - 加耶から新羅へ -」『港都釜山』19 卷
- 金斗喆 2007 「三国・古墳時代の年代観」『韓日三国・古墳時代の年代観Ⅱ』、韓国国立釜山大学学校博物館・国立歴史民俗博物館
- 金斗喆 2013 「加耶転換期の墓制と継承関係」『考古広場』第 13 号、釜山考古学研究会
- 金斗喆 2017 「蓮山洞古墳群と古代釜山」『港都釜山』34、釜山市史編纂委員会
- 金龍星 1996 「土器による大邱・慶山地域古墳の編年」『韓国考古学報』35
- 金一圭 2018 「金官加耶古墳出土外来遺物の性格と意義」『湖南考古学報』第 60 集、湖南考古学会
- 大成洞古墳博物館 2013 『東アジア貿易の懸け橋! 大成洞古墳群』
- 東亜大学校博物館 1971 『東萊福泉洞第 1 号古墳発掘調査報告』
- 朴永民 2013 「4 ~ 6 世紀金官加耶の邑落構造」慶北大大学院碩士学位論文
- 朴天秀 1993 「三国時代昌寧地域における集団の性格研究」『嶺南考古学』13、嶺南考古学会
- 朴天秀 2010 「新羅加耶古墳の暦年代」『韓国上古史学報』第 69 号、韓国上古史学会
- 裴孝元 2017 『釜山地域墳墓出土新式陶質土器研究』釜山大学校大学院碩士学位論文
- 福泉博物館 2017 『水營江で花咲いた釜山文化』
- 釜山大学校博物館 1985 『金海礼安里古墳群 I 図面・図版』
- 釜山大学校博物館 1993 『金海礼安里古墳群 II 図版』
- 申敬澈 1989 『三韓・三国・統一新羅時代の

引用文献 (カナダラ順)

慶尙文化財研究院 2017 「金海元支里古墳群 (3 号墳) 緊急発掘調査略式報告書」

- 釜山』『釜山市史』第一卷
- 申敬澈 1995「金海大成洞・東萊福泉洞古墳群点描」『釜大史学』19
- 申敬澈 2000「金官加耶土器の編年 - 洛東江下流域前期陶質土器編年」『加耶考古学論叢』3、駕洛國史蹟開發研究院
- 申勇旻 2000「弁・辰韓地域の外来系遺物」『考古学から見た弁・辰韓と倭』嶺南考古学会・九州考古学会第4回合同考古学大会
- 沈載龍 2016「金官加耶の外来系威勢品受用と意味」『嶺南考古学報』74、嶺南考古学会
- 安在皓 2005「韓半島出土の倭関連文物 -3～6世紀を中心に-」『倭五王問題と韓日関係』、京仁文化社
- 嶺南考古学会編 2013『日本による植民地時代嶺南地域における古蹟調査』学研文化社
- 李熙濬 1995「慶州皇南大塚の年代」『嶺南考古学』17、嶺南考古学会
- 李熙濬 1998「金海・礼安里遺跡と新羅の洛東江西岸進出」『韓国考古学報』39
- 李熙濬 1999「新羅の加耶服属過程に対する考古学的検討」『嶺南考古学』25
- 李熙濬 2007『新羅考古学研究』社会評論
- 井上主税 2006『嶺南地方出土の倭系遺物から見た韓日交渉』慶北大学校博士学位論文
- 趙晟元 2017「4世紀金官加耶の対外関係検討」『考古広場』21、釜山考古学会
- 朱甫暉 1997「4～5世紀釜山地域の政治的方向」『福泉洞古墳群の再照明』釜山広域市立福泉博物館
- 朱甫暉 2006「高句麗南進の性格とその影響 - 広開土王南征の実像とその意義 -」『大邱史学』82、大邱史学会
- 崔秉鉉 1992『新羅古墳研究』一志社
- 朱甫暉 2017『加耶史を新しく読む』周留城
- 崔鍾奎 1983「中期古墳の性格についての若干の考察」『釜大史学』第7号
- 崔鍾奎 1994「考古学的に見た3・4世紀の韓国嶺南地方」『古代東亜細亜の再発見』湖岩美術館
- 洪潛植 2000「考古学から見た金官加耶」『考古学から見た加耶』韓国考古学会
- 洪潛植 2014「新羅・加耶古墳交差編年」『嶺南考古学』第70号、嶺南考古学会
- (原文: 趙晟元「金官加耶考古学の研究成果と流れ」『韓国古代史研究』94、韓国古代史学会、2019年、pp.49～85)
- 謝辞: 翻訳について快諾して頂いた趙晟元先生に文末ながら感謝いたします。そして、翻訳作業には高田遼和さんにも参加してもらった。今回共訳者として氏名を記す事ができず多くの寂寥感を感じているが、ここに記して感謝し彼の仕事に敬意を表します。なお、本翻訳および関連資料の調査において、JSPS 科研費(課題: 22KK0009)の支援を受けた。